
少女崩壊～少女権利 番外章～

Circlecafe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女崩壊〜少女権利 番外章〜

【Nコード】

N1572P

【作者名】

Circlecafe

【あらすじ】

小説【少女権利】、その続編【少女反逆】の番外編です。

▼シリーズはこちら

<http://ncode.syosetu.com/s0896a/>

（前書き）

小説【少女権利】、その続編【少女反逆】の番外編です。

少女権利><http://ncode.syosetu.com/n5330/>

少女反逆><http://ncode.syosetu.com/n1347/>

少女権利からお読みいただけると話が繋がります。

ひゅ…ひゅ…

鉄の仮面の中で自分のか細い息が反響する音で気が狂いそうだ。

あんな子供じみた発想で見捨てられた自分。

そもそも元よりこうなる決まりで、それをやらされていたただけなのかもしれない。

自分の不幸。

かわいそうな存在。

今では、自分の手で殺してしまった人たちの事のほうが幾分かマシに思える。

死にたい。

誰かに殺して欲しい。

できるだけ苦しまない方法で、気づかないうちに自分の頭をかち割り消して欲しい。

死なないあの子と死ねない自分。

私は何を間違ったの。

自問自答はもうたくさん。

どうしたって何にもならなかった。

意味なんて無い。

何にも声に出せない。

声を出そうとすればまた喉を、かな切るような嫌な感触になるだけ。

隙間から覗く部屋。

もう怖くない。

前はどんなところに行くのも怖かった。

こんな縦一本の細長い隙間から見える世界。
その周囲がどんな状況でももうどうでもいい。

ただ、もう苦しいのと不快な思いをしたくない。

コン…コン…

足音。

きっと私にまた何かしにきたんだろう。
もうどうでもいい。

「ひゅ…はひゅ…」

なんで私は逃げてるの。

音のしない方向へ体を起こし走り出してしまった。
嫌だ嫌だ。

もう何もしないで
私は悪くないのに…

強い音がした。

多分、殴られたんじゃない。
情けなく私が壁に激突しただけ。

■ part . 1

「……すごい！すごいわおねえちゃん！」

目が覚めたら夢のようだった。

それはこの事かもしれない。

貧乏だった孤児の自分が目を覚ますと、暖かいベッドの上に寝ていたのだから。

「…いつ着替えたのよ」

妹におこされた双子の姉、レイラは、妹のアリドラの服装を見て怪訝そうな顔で言った。

お姫様のような白いフリルの服。

上等な生地が肌触りよく幼いアリドラの体を包んでいる。

「あ…」

レイラの服装は以前と同じみすばらしいボロ布のようなもの。

高級そうな深みのある木の調度品で飾られたこの部屋に酷く似合わない。

「……ま、とにかくあいつのいつてた事は本当だな、立派なお屋敷なんだろう」

レイラが体をおこす。

アリドラの服と同じ真っ白なシャツが少し砂埃で汚れている。

数日前、ゴミを漁る二人に手を差し伸べたいかにも金持ちそうな女性。

その女性は二人をひきとると言った。

自分達と同じ金髪と碧眼が、親戚筋である事を示しているのは幼い二人にも理解できた。

両親の家が何者かに焼かれ、孤児となり彷徨ってから数ヶ月たった日の事だ。

長い移動、眠たくなるのを優しく許してくれた自分達の叔母にあたる人。

起きない二人をここまで運んでくれたのだろう。

「ん…いいなその服」

ものほしそうにアリドラの服を見るレイラ。

「あ…あげるわ」

アリドラは急いで脱ぎその服を姉に渡す。

「…あのな…それで何着るんだよ」

下着姿の妹を見て姉はそう言う。

「あ…あは…でも私着てたから今度はおねえちゃんの番」

レイラはその服を着るとベッドからおり、部屋を物色する。

「ほら、こん中」

クローゼットをあける、その中にはぎっしりと服が。

「どれが…似合うかな」

アリドラは少し恥ずかしそうに聞く。

「ん…私が白きてるから黒きとけ。見分けつかないからな」

レイラはその髪を二つに結びながら適当に答える。

「なんだこれ」

レイラ、アリドラとそれぞれの名前が書かれた手紙のようなもの。

部屋の中央のテーブルの上に置いてある。

「意味わかんないな」

アリドラのぶんをわたしながらレイラが先ずひらく。

「ん…おねえちゃんのやつはなんて書いてある？」

アリドラもその難解な手紙を読みながら聞く。

「部屋を出るだと、私の部屋でも外にあるのかな まったく…驚か

せようとしてわざと私だけ着替えさせてないな」

大人びた台詞を言いながら大あくびをする。

「さすがおねえちゃん！」

頼りになる姉だ。昔からこうだった、全てを率先してくれる。

姉といると新しい発見があつて緊張したけどいつも嬉しかった。

「私は”部屋を出るな”だつて」

叔母の粹な計らいに、ニコニコと姉を送り出すアリドラ。
姉は『いつてくるわ』といったかんじで部屋の外に出て行く。

「うふふ」

アリドラはこれからの事を考えて思わず笑みがこぼれてしまう。

ドアが開いて姉が戻ってくる。

「外はお化け屋敷みたいだぞ…」
複雑な表情の姉がそこから覗く。

「え…」

理解する前に姉の体が横に飛ぶ。

バン！！！！

急にドアが閉まる。

「お…おねえちゃ…？」

閉まる時に誰かが見えた。

姉を助けなきゃとノブに手をかけたとき

「あううつ！！」

外から何かを叩く音と姉の声。

恐怖で体が動かなくなる。

「ひ…」

ドアと床の隙間

そこから手紙が差し入れられる。

少し血のついた、白い封筒…

■ part . 2

アリドラは突然の事に怯えきっていた。

理解できないが姉は何者かに襲われた。

部屋の奥の角でうずくまりドアから目を離せない。

その手に握り締めているのは思わず拾ってしまった、まだ未開封の血のついた封筒。

蠟燭で明かりをとる部屋の照明の揺れが恐怖を煽る。

「あ……」

よく見れば蜀台の蠟燭はだいぶ短くなっている。

あれが消えてしまつてはこの部屋は暗闇。

「う……」

勇気をだして立ち上がる。

蜀台のすぐ横に置かれた木箱の中には何本も蠟燭があるのを見た。

「は……は……」

大して動いてもいないのに呼吸は荒い。

やつとの思いで蠟燭の何本かを新品にとりかえると少しだけ安堵感を得る。

また部屋の隅に戻ると、ふと手紙が気になりそれをひらく。
付着した僅かな血は姉のものなのだろうか。

『通達に逆らうな 与えるアリドラ』

そう始まりが書かれた手紙。

通達とはこの手紙の事なのだろう……

底知れぬ恐怖で体が一瞬震える。

「……あなたの呼び名は”与える”アリドラ……その呼び名にしたがい……」

怖さを紛らわす為、声に出して読む。

ガゴ……

「い……い……」

いきなりドアが開き奇声をあげてしまう。

「え……」

ひらいた向こう、蠟燭の明かりが届いたところにある大きな木箱。
そしてそこに山盛りにいれられた食料。

「あ……あ」

そういえばここに来るずいぶん前から何も食べていない。
誘われるようにそこへ近づいていく。

「ひ……」

近づいたとき見えた その木箱の陰にしゃがむ人影。

「わあああああ」

足がすくんで動かず声が出るだけ。

「……こわがらないで」

その影は、女の子の声。

「え……」

怯えつつ暗がりを見込み込むと、少し前までの自分のようなみすばらしい服装の黒髪の少女。

「……あなたが……もってきてくれたの？」

人とわかると安心感もある。

自分より少し年下な感じもある少女に話しかける。

「うん……」

アリドラにはその子の目が、自分を着ていた白い服を見る姉の目と

だぶる。

「いる…？」

木箱の中身の食料を指差す。

目の前の少女は見るからに空腹そうだったから。

「うん！」

少女はその箱の中身を持てるだけ抱える。

「ありがとう！」

「あ…ちよつと…！」

少女はそれを持つやいなや走り去ってしまう。

「な…なんだつたの……」

奇妙なこの状況がまるで理解できない。

「おねえちゃん……」

少女の足音が離れ消えてから、小声で真つ暗な空間に呼びかける。
る。

何も反応は無い。

「……………」

木箱を部屋にひきずりこみ、ドアを閉める。

「あ…」

またあの手紙がその側面にはりつけてあるのが目に入る。

「つ……通達…」

さっきの手紙に書いてあった通りならこの内容には従わなければならない。

恐る恐る開く。

『自身で選んだ物を客に与えよ』

「……………」

木箱の中身は、食料だけでなく、衣服やブラシ…そして新しい蝋燭それから毎日、同じ頃に木箱は届けられた。毎回来るのは違う少女だが、みな一様に薄汚れた貧相な姿で。アリドラはその度にその子達に木箱の中身を分け与えた。

■ part . 3

扉がノックされる。

怖くて開けられない。

木箱が届けられる時は扉は向こうから開かれる。

この一日の区切りをかんじない空間。

アリドラは部屋に窓がない事にいまさら気がつく。

ノックの音はすぐにやみ、変わりに声が聞こえた。

「アリドラ…私だ…」

何日ぶりだろう、その声はまぎれもなく姉。

「おねえちゃ…!!」

扉の向こうの姉はだいぶ衰弱していた。

顔には痣…

「な…中に入って…」

その姿に驚愕しながら招く。

「いや…中に入れないんだ…」

「一瞬理解できなかったが、姉にもきつと”通達”が出されているのだ。」

顔の痣はきつと強気なレイラが逆らってつけられたもの。

通達どおりに行動できていた自分に少し胸を撫で下ろしてしまう。

「あ…じゃあ…」

一瞬自分の身の事だけを考えてしまった後悔を消すように、部屋の中からいろいろなものを持つてくる。

「あ…あの…これ」

何故だか少し他人行儀になってしまいながらそれを渡す。

「私は、お客に与えろって通達だから大丈夫！」

なんで作り笑いをしているのだろう…そんな事を思い出しながらいろいろなものを姉に渡す。

「…私の部屋は何も無いから…助かるよ」

それだけ言つとレイラは背中を向け歩き出す。

「あ…おねえちゃ…」

追いかけてよとすると振り向くレイラがそれを止める。

「最初に…部屋を出るなとかかれてただろう？」

それだけ言い暗闇に消えていく姉。

「これだけなの？」

その後しばらくして今日のぶんの木箱をもつてきた少女はそう言った。

姉の事を思うと多くをわけてあげられないのだ。

無言の時間が少しすぎると、少女はいつもと同じようにどこかへ歩いていく。

翌日、姉は来た。

少し顔色は戻り、痣も消えている。

「傷…」

怪我の気になっていたアリドラは、綺麗になった顔を見つめてしま

う。

「ん？ああ、なんか怪我の治りはやいんだ」
そう言う姉はまたいろいろと受け取る。

そして翌日も、その翌日もアリドラは木箱を受け取り、姉にそれを分けた。

実際この部屋に来てから一日というものがわからない。
だからアリドラは木箱を受け取ることを”朝”とよび、姉が来るときを”夜”とよんだ。

時折姉は怪我をしていたが、翌日には綺麗になっていた。

「すごいね…わたしも怪我したら治るかな」

純粹な思いで、その異常な回復を喜んだ。

「やめとけ、痛いぞ」

姉は言っていた。必ずこの建物の秘密を解いて逃げようと。

それであたりを散策しているが出口もなにもなく、自分の部屋と姉の部屋、そして廊下しか見つからないと。

廊下は木材のようなものが転がっていて時折怪我をしていると。

「でも、木箱もつてきてるから出口はどこかにあるよ！」

アリドラは希望に満ち溢れていた。

頼りになる姉が自分の為に傷ついている、それでも私は姉にいろいろと分ける事を許されている。

そんな共感が彼女を明るくする。

「時間だ…いくよ」

レイラは部屋からの外出時間が決められているといった。

懐中時計だけ、自分の部屋に最初からあったと見せてくれた。

金の装飾の綺麗な時計。

ある日の事、朝がこなかった。
繰り返すことで時間のリズムを捉えていたアリドラはそう感じた。
木箱が届かない。

少し不穏な感覚に捉われていると、姉がやってきた。

「木箱が来なかったの…」

そううなだれるアリドラ。

「じゃあ、何か部屋の中のもの…」

机の脇にある、アリドラが食べ切れなかった食料をしまっている木箱を指差す。

「え…あれは私…ちゃんと半分わけてるじゃない」

いつも確実に半分をわけていた、不公平のないように。

「……そっか…」

レイラはそれを聞く。

「ん？」

何かに気がつきレイラが廊下の隅を、持ってきていた小さな蜀台を向けて照らす。

「……！！」

そこには木箱と、うつぶせに倒れる少女。

「あ…木箱よ！おねえちゃんもってきて！…」

アリドラが催促する。

レイラは木箱に蜀台を載せ抱えると、扉の前をそのまま通り過ぎる。

「え…！！どうして…」

驚いた顔でアリドラが呼び止める。

「これは私のだ、通達どおりだ」

そういうとそのまま歩き出す。

「違うわ！それは私の…」

レイラが木箱を置くとアリドラのところまで戻りその顔を覗き込む。いつもと違う冷たい目線。

「私は”略奪”と書かれていたの。奪いなさいとね…アリドラ…おかげで全て手に入れる事ができたわ」

淡々とした声。

「罠をしかけたの、あの子を捕まえる。貰ったナイフは役に立ったわ」

少し前、アリドラは果物ナイフを姉にあげたのを思い出す。

「……部屋にははいれないからね、もし捕まえ損なったらまたわけてね」

ドン…

レイラの手によって閉じられる扉。

■ part . 4

翌日木箱は届いた。

レイラの罠は失敗したのか。

あの後になって、姉は人を殺したという事がアリドラの意識の中で渦巻いていた。

想像していた通り、姉は来た。

「アリドラ、分けてもらえる？」

通達の縛りを理解しているのだろう。

きっとレイラはアリドラの知らないところで通達を違反して何かしらの罰則を受けているはず。

「いいわ」

パン屑だけを渡す。

「どういう事…かしら…」

口調すら違って聞こえるような姉を追い返すよう、外に開くドアを閉めようと手を伸ばす。

「は…離して!!」

その手を掴むレイラ。

ギリギリと強く。

「あなたの手は外に出てる、言う事を聞かなければこの腕を…!」
取り出したのは果物ナイフ、今日は罫をしかけず、こうするつもりで来たのか。

「……離さないと!!これからは屑を扉の外に投げるだけにする!
!それでもいいの!!」

レイラの手が一瞬緩む、しかしまたすぐにひっぱられ上半身が外に出る。

「アリドラ…通達破りね…」

片足が、ドアの敷居を踏み越えている。

「な…なにも…おこらないじゃない…」

ビッ…!!

「痛ッ…」

アリドラの腕にどこから飛んできたか長い針のようなものが刺さる。

ビッ…ビシッ…

同じ方向から白い腕、足にと、次々にその針は飛んでくる。

「は…はなして…痛い…いた…言う事きくから!!!!」

ガシャン!!

もがいたあげく、いきなり手を離され部屋の中に転がり込む。

「はあああ 痛いよ……痛いよ……」

何本も針を突き立てられた体が痛々しい……

「さて、渡して？」

痛む体で姉の言うとおりに木箱全てを差し出す。

「そ、姉のいう事は一回で理解しなさ……あ……」

襟を掴んだアリドラがレイラを部屋の中に引き込んだ。

「……この……」

アリドラをふりほどいたレイラの体は完全に部屋の中。

「通達破りよ……」

涙目のアリドラが勝ち誇ったように言う。

「……ふふ……何もないわね」

少し時間をおき姉が笑う。

針が飛んでくるどころか、何もおきない。

「あはは！！どうやら私は”外に出る””っただけで”中に戻る”事は禁止されていないみたいね」

バチン！

レイラがアリドラの頬を殴る。

「どうしようもない妹ね、教育してあげるわ」

何度も何度も殴る。

倒れこみ刺さっていた針がより深く体に潜り、悲鳴があがる。

トロトロと血が流れ、転げまわるアリドラ。

「はあ……はあ……はあ……」

息を荒げながらレイラは木箱に部屋のいろいろなものを詰め込み、腹いせにあちこちをひっくり返す。

「う…う…」

泣くしかできないアリドラを後ろに、さんざん破壊をすると部屋の戸口で立ち止まる。

「アリドラ、また来るわ」

ゴシュ…

レイラが外に踏み出した瞬間の鈍い音。

「つつぎゃああああああああああああああああああああ
木箱がひっくり返り中身がぶちまけられる。」

「……」

姉の足首に刺さるのは大振りな刃物。
半分からいまで突き刺さったそれが、暴れることによって外れアリドラの部屋に転がる。
パツクリとひらく傷。

アリドラの目に映る姉の白い服にとびちる赤。

「はあ…はあああああいてあああああ
痛そうだ。」

開いた傷口からピューピューと鼓動にあわせて出る血液。
アリドラは気がつけば戸口でその姉を見下ろしていた。

「あ…アリドラ…痛い…痛いよ……」

バン…

「レイラ、通達違反よ…」

そう言いながら閉じた扉に背中をつける。

向こう側から聞こえる姉の鳴咽。

「はあ…はあ…」

アリドラは安心感のせいかな緊張がとけたせいか、自分の足に暖かい液体が伝うのを感じていた。

「はあ…はあ…はあ…」

あんなに血をみたのはじめてだ、それに今自分は情けなく漏らしてしまっている。

怪我をしているのは自分の姉だ、でもきつと姉は大丈夫。

このおかしい空間に来てから、姉は汚してもあんなに簡単に治っていた。

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

ほら、やっぱり姉が足をひきずって離れていく音がする。

自分のびしょ濡れになってしまった下腹部に手をあてる。

「レイラ…」

姉の名前を呟くその身が、何故か昂揚しているのを感じた。

■ last part .

姉はその後何度かは来た。

あまりのみすばらしさに食料を分けた。

時には我俣につきあって、服や髪飾りもあげた。

その時は姉の事を愛しく思うこともあった。

罨をしかけられないよう、刃物等は与えなかった。

しばらくして姉は来なくなった。

時折廊下からけたたましい声が聞こえて、そんな日は必ず木箱は届かなかった。

あるひの木箱はとても大きく、保存の効く食材で満たされていた。

「……」

持ってこられた木箱は物音が消えてから扉を開けると、誰もいなくなっているから、煩わしいときはそっという受け取り方にした。

『同階の何もない者に与えよ』

そんな通達が届いた。

そこに示された地図は姉の部屋だと思った。ただど違った。

姉に会いに行くのは怖くは無かった。

通達であるって事はきつと守られているし、なによりその時に同時に届けられた小さな木箱。

中身はテレビで見た事のあるもの。

拳銃。

ご丁寧に使用法まで書いてあるそれを持ち、私は外に出た。

初めて歩く廊下は思いのほか綺麗だった。

途中にある扉は姉の部屋のものだろう。

今日は私のためか、あの暗かった廊下の壁は明かりがあり、壁が白いのを確認できた。

その子は毛布にくるまって寝ていた。

はじめて木箱を持ってきた子を思い出すような長い黒髪。

あの子は黄色い瞳ではなかったけど。

ああ、そうか。ロナに殴られて私は銃を落としてきたんだ。
それを姉が拾って…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1572p/>

少女崩壊～少女権利 番外章～

2010年12月10日23時57分発行